

岡山のとしょかん

岡山県図書館協会報
(第123号)

岡山市立図書館創立 100 周年

岡山市立図書館は平成 28 年度に創立 100 周年を迎えました。

岡山市は大正 5 年に実業家の山本唯三郎から寄付を受け、同年 10 月 6 日に岡山県の認可を得て、翌々年の大正 7 年 12 月 8 日に図書館を開館しました。したがって平成 28 年は設置認可から 100 周年にあたり、この 1 年間は図書館の歴史の掘り起こしに努めてきました。

市内の小橋町（山本唯三郎ゆかりの環翠小学校跡）にあった戦前の市立図書館は、昭和 20 年 6 月 29 日の岡山空襲で罹災し、直前に疎開できた数百冊を除く大半の蔵書と建物を失って、戦後の再建は困難をきわめました。



【戦前の岡山市立図書館】

そこで蔵書印などから戦災を免れた書物を探したところ、近世の写本を中心に約 200 冊が判明したので、危急のとき最初に持ち出されたこれらの貴重書を「岡山空襲の日」にあわせて 6 月 29 日～8 月 7 日に展示しました。

続く 9 月 21 日～10 月 30 日には市立図書館の 100 年間から、山本唯三郎の寄付の事情、戦前の普及活動、戦後の図書館復興に焦点をあてた資料展示を行いました。

図書館の開館式へ来賓として招かれた山本は、

貧しい家庭に育ち、苦学の末に事業で成功を取めた半生を振り返って、「教育はひとり学校のみには俟つべきものではない」と述べたと報じられていますが、社会教育施設としての図書館の必要性を訴えたこの言葉は、今も色あせない熱い響きをもっています。

10 月 8 日にはその年末に逝去されたノートルダム清心学園理事長の渡辺和子先生の記念講演会を行いました。このときは 100 人余りの参加者がそれぞれ大切な何かを受け止めたことと思いますが、二・二六事件で非業の死を遂げた父親の渡辺錠太郎・教育総監が、最期の際にまだ幼かった先生へ掛けた優しい言葉から、以後ずっと親の深い愛情を感じながら生きてこられた、というくだりが心に残りました。

11 月 2 日～12 月 28 日には、「ひろがる酒の輪」と題して県内 13 機関（図書館、記録資料館、博物館）が連携した、「酒」が共通テーマの展示に参加しました。日本の文化に深く根を下ろす酒については地域ごとに多様な資料が残されていますが、資料保存機関どうし、もっと手を携えようという思いから（とくに大規模災害に瀕したら互いの連携は大切です）、100 周年の先を見通す事業となりました。

いうまでもなく図書館の仕事の基本は一人ひとりの利用者への資料提供ですが、そのことを保障する図書館が組織体として成り立つには、多くの人の献身や努力が重ねられています。知の営みを支える図書館からは、人の出会いの大切さと言葉のもつ重みを考えずにいられません。それは 100 年前も今も、そしてこれからも変わることはないでしょう。

（岡山市立中央図書館 飯島章仁）

勝央図書館 秋の読書週間行事 「ハロウィンパーティー～本を読まないといたずらしちゃうぞ～」

10月30日(日)勝央図書館は、図書館ボランティアの協力のもと、魔女やお化けに扮した参加者と一緒に、本と仮装とハロウィンの読書推進イベントを楽しみました。

参加者は、ハロウィン風装飾の館内を特別なパスポート「ハロウィンパスポート」(ハロウィンの由来や、読書手帳の作り方等を記したスタンプ帳)を持って、7つのコーナーを回りました。「魔女の読書手帳作り」や「本クイズ」は人気が高く、親子や友だち同士で協力しながら、工夫を凝らした作品や、本を読んで目を輝かせながらクイズにチャレンジする姿が印象的でした。「きんとくん」オリジナルグッズプレゼントも喜ばれ、かぼちゃのランタン工作、外国人による英語と歌、民話のハロウィン、ブックカフェなど盛りだくさんのイベントで秋の一日を楽しく過ごしました。



【魔女の読書手帳作り】

司書が参加者に対し本のアドバイスをを行ったところ、後日、子どもが図書館で紹介された絵本をととても気に入ったので、次も読みたいと親子で来館されました。このイベントは、本や図書館に興味を持ってくださる良い機会となりました。今後も、図書館に興味関心を持って頂けるよう工夫していきたいと考えています。

(勝央図書館 関瞳)

秋の読書

美作市立英田図書館 返却しおりをあつめよう

美作市立英田図書館では、毎年読書週間に児童向けの「図書館クイズ」を行っています。新たに幅広い年齢層を対象としたものを行いたいと考え、前年に作東図書館で行い好評だった「返却日記載のしおりにクーポンをつけて集めてもらう」イベントを取り入れました。

台紙に1つ1つクーポンを貼っていくことで視覚的な楽しさやワクワク感、達成感も味わえるのではないのでしょうか。そして、本を読むことの楽しさに気づいてもらい、図書館が生活の一部になることが司書としての喜びです。この新たな企画により、継続的に利用して下さる方が増えたことが大きな成果だと思います。

今後も図書館に足を運んでもらうきっかけになるような楽しいイベントを企画していきたいです。



【しおりクーポンの台紙としおり】

(美作市立英田図書館 中田智子)

読書週間イベント 「つって楽しい! ないしょのおはなし」

毎年、赤磐市立赤坂・熊山・吉井図書館の3館で協力し、読書週間イベントを行っています。今回は、全国の図書館でもよく行われている本のお楽しみ袋や福袋にひと工夫加えた「つって楽しい! ないしょのおはなし」です。内容は、魚釣りをして、釣れた魚に書かれた番号の「本のお楽しみ袋」を借りるというものです。小学生以下を対象に幼児・小学1～3年・小学4～6年の3つに分け、年齢に合った絵本や読みもの、知識の本など新しい発見があるようにとバランスを考えながら選んだ3冊を紙袋に入れ、ラッピングしました。

大変好評で、同封したアンケートには、「魚つりのゲーム、すごく楽しめたようです。子どもがもっと本好きになるに間違いはないと思います。」「きれいな紙袋にリボンまでついていて、プレゼントのようでした。」などの感想がありました。次も喜んでもらえる企画を考えていきたいです。



【番号が書かれた魚】



【本のお楽しみ袋】

(赤磐市立熊山図書館)

週間行事

笠岡市立図書館の取組 ～特集について～

笠岡市立図書館では、今年度の読書週間で9つの特集コーナーをつくりました。定番の特集や時事的な特集などです。中でも人気があったのは「子ども司書」による特集コーナー。平成24年から始まった「笠岡子ども司書」養成講座の修了実習として、POP作りの講座を毎年設けています。それぞれに特集テーマを決め、1人3～5冊のPOPを作成。現在ではかなりの冊数なのですが、展示するとすぐ貸出になってしまう、「鉄板」特集です。

このように人気の特集もあれば、毎日5～6冊しか動かない特集もあります。介護や法律など、必要がなければあまり借りられない分野の特集です。これらの特集は「こんな本もありますよ、必要になったら図書館を思い出してくださいね。」というPRを目的としているので、一番目立つ場所で積極的に行っています。もちろん利用者に気づいてもらわなければ意味がないので、色々な所からパネル等を借りて、なるべく目立つように展示しています。

今後も「図書館に行けば面白い本がある」「図書館で本を見たことがある」そう思ってもらえる特集作りに職員一同で励みたいと思います。

(笠岡市立図書館 原田恭江)



【子ども司書展示】

平成28年度岡山県図書館協会 研修参加助成事業報告(1)

研修：第102回全国図書館大会東京大会

期日 10月16日(日)

会場 青山学院大学(東京都)

今回は1日のみの開催です。午前中に開会式・全体会・記念講演、午後から分科会という日程でした。大会テーマは「地域創造と図書館の未来」。ここでは、午後から参加した分科会について、少し詳しくご報告したいと思います。

参加したのは第13分科会(利用教育)で、テーマは「館種を超えた情報リテラシー教育の枠組みづくりに向けて—先駆的事例から考える図書館の新しい役割—」。参加者のほとんどは学校・大学図書館関係者でした。この分科会を選んだのは、公共図書館に勤務している自分が今まで体系的にはそれほど意識したことのなかった情報リテラシー教育(公共図書館においては支援)について、まずはいろいろな事例を聞いてみたいと思ったからです。

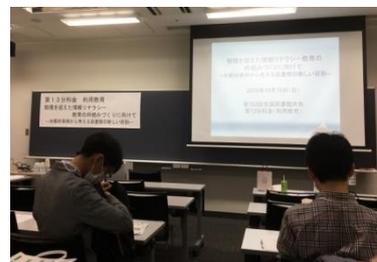
はじめに、この分科会開催の大きな動機付けが、館種ごとに情報リテラシー教育を扱うことに限界を感じ、図書館界全体で必要なことを探っていきたいという思いであることが述べられました。もちろん、館種ごとのきめ細かい教育は必要ですが、個々に行うことで重複が生じたり、逆に大切なことが抜け落ちたりという危惧が大きいということです。包括的な視座が求められる、という前提で分科会は進められていきました。

高大接続の問題点を報告した大学図書館からは、参考文献の書き方を含む小論文等の文章作成における高大のギャップが指摘されました。また、大学の勉強に必要な「問いの設定」「結論の探究」「問いを見直す」というプロセスを、情報リテラシー教育の観点から高大のどこかで教え込む必要があるにもかかわらず、それがうま

くっていないということでした。

公立図書館における情報リテラシー支援の課題についての報告では、まず、情報リテラシー支援に関する今までの公立図書館の実践を再考し、それに対する考え方を整理することが重要ではないかと述べられました。そして、「なぜ必要か」「何を実施するか」「どのように実施するか」と考えを進めていきます。最終的に公立図書館で情報リテラシー支援が目指すものは、具体的な問題を発見し、それを解決するという一連の行動を支援することであると結論づけられました。この「問題発見」は、大学図書館の報告で触れられた「問いの設定」とも似ており、このあたりに包括的な情報リテラシー教育(支援)の必要性が垣間見えるかもしれません。

最後の報告では、公立図書館での実践例がいくつか示されました。ある図書館では、職員が近隣の高校に赴き、小論文ミニ講座を開催したとのこと。これは、上記の大学図書館の高大のギャップの案件と重なるところがあります。



全ての報告の後、3~4人ずつに分かれてグループワークを実施し、分科会は終了しました。

【分科会の様子】

館種を超えた情報リテラシー教育の枠組みづくりは、まだ発展途上です。公共図書館に勤務する自分としては、報告にあった通り、まず、情報リテラシー支援に対する考え方の整理から始めていく必要があると思いました。ただ、全市民に開かれている公共図書館でこそ、利用者が自立して情報リテラシーを持つことへの支援の重要性は問われていくべきであろうし、また、そうすることで、館種を超えた枠組みについても言及していくことができるようになると思います。

(西大寺緑花公園緑の図書室 山崎佳代)

平成28年度岡山県図書館協会 研修参加助成事業報告(2)

研修：平成28年度全国公共図書館研究集会

(サービス部門 総合・経営部門)

期日 1月19日(木)～20日(金)

会場 北九州市立商工貿易会館(福岡県)

基調講演：「住民を輝かせる図書館を創ろう！」

花井裕一郎氏(hanajuku 代表)

まちづくりの中心に図書館を位置づけ、図書館を、まちに生きる人々が世代をつないでいく場に、また本が嫌いな人も集える場にしていこう。そのためには、一部の利用者のためだけの図書館ではいけない。図書館にまだ足を運んだことのないお客さんに、直接、図書館の外で「何があったら図書館に行きたいと思う？」とリサーチして、それを活かした取組を行っていくことが大切。人は居心地のいい場所に集まってくる。規則ばかりではなくて、曖昧な空間(グレーゾーン)を演出する。どんな図書館をめざすのかは、市民を巻き込んでワークショップを重ね創り上げていく。決まれば、それを理念として常に図書館活動の念頭に置くことが大切だとまとめられた。



【講演開始前の様子】

事例発表1「ネットワークと住民参加によって図書館がもっと輝く」森山光良氏(岡山県立図書館)

2004年の新館開館から10年連続貸出冊数1位をキープし続けている。岡山情報ハイウェイを活用して、県民参加型の、郷土岡山について百科事典的に調べられる「デジタル岡山大百科郷土情報ネットワーク」を構築。現在、各種機関とも連携をとりながら、コンテンツ数を増やしていると説明された。

事例発表2「市民にわかりやすい本棚を目指して」甲斐真由美氏(宮崎市立佐土原図書館)

図書館入口付近に常時6～10程度のテーマにそった展示・貸出を行い、昨年は年間147の展示コーナーを設置。ほぼ、2日に1度入れ替えるペース。平成13年の図書館準備室段階から、NDCは一般利用者には分かりにくい、検索機を使わなくても、子どもでも高齢者でも本が探せる本棚をつくらうと、検討を重ね、宮崎市立図書館と県内図書館の蔵書分析に始まり、NDCをすべて検討し、振り分けを行い、現在は佐土原図書館独自のジャンル分け一覧によりTRCと連携を取りながら運用していると述べられた。

事例発表3「まちづくりと図書館-コミュニティライラ-をめざして」伊東達也氏(春日市民図書館)

平成23年に1人の司書が先進地視察に行き、カリスマ公務員ではなく、行政と一緒に活動する市民ボランティアの姿に感銘を受けた。市民図書館を魅力的にするために市民の意見を聞く「図書館しゃべり場」(ワークショップ)を開催。大人も楽しめるイベントを開催してほしい、図書館員を体験したいなどの意見から、ボランティアを募り、実行委員会形式で「夜の図書館」実施。ほかにも、図書館に行ったついでに何か手伝う「図書館ついで隊」。市民参加型事業を多く実施し利用者の輝く場を提供してきた。1つの同じ図書館を利用している市民のつながりが、コミュニティをつくっていていると感じた。

(総社市図書館 西口早苗)

岡山県視覚障害者センターを 見学して

12月21日、私達企画委員は、岡山県視覚障害者センターにお邪魔しました。2016年4月1日から障害者差別解消法が施行され、公立図書館は読書が困難な人に図書館を利用できるよう合理的配慮が求められるようになりました。所長の川田さんは、「視覚障害者の方は圧倒的に情報量が少ない。一人でも多くの方にサピエを知ってもらうために、図書館協会の機関誌に載せてもらうことは非常に意味があることだと思います。この施設は障害者手帳を持っていない方でも利用できると言うことを皆さんに知ってもらいたい。」と熱く語られました。



【点字図書架】

センターで行っているサービスは、主なものだけでも①点字図書・デイジー図書の貸出サービス②点訳・音声訳サービス③点字資料のプリントサービス④対面朗読サービス⑤中途視覚障害者の相談事業⑥各種集会・研修会・料理教室の開催⑦点訳・音声訳ボランティアなどの養成講座の開催と多岐にわたっています。①の点字図書・デイジー図書は、書庫一杯に整然と並んでいました。スペースを取られるので点字図書は紙媒体ではあまり増やせず、場所の確保が問題だそうです。デイジー図書は、ケースごと専用再生機に入れるタイプ、ケースから出すタイプと機器の発達に伴って色々なタイプが混在して、利用者の方がお使いの機器に合うタイプのデイジー図書を選んで送付しているそうです。中途視覚障害者の方は点字を習得するのが困難なので、ほとんどの方が、デイジー図書を利用されています。ここで登場するのが「サピエ」です。サピエは、

センターで行っているサービスは、主なものだけでも①点字図書・デイジー図書の貸出サービス②点訳・音

視覚障害者や活字による読書に困難のある人が利用できるコンテンツをはじめ、暮らしに役立つ身近な情報など様々な情報を提供するネットワークです。個人会員になると、90万近いコンテンツを利用することができ、しかも利用料は原則として無料です。全国に31万人いるといわれる視覚障害者の中でサピエに個人登録している人はわずかに1万4,000人。全体の5%にも足りません。サピエに登録し読書環境が改善された利用者の方が「ここにたどり着くまでが長かった」と嘆息されていたとお聞きしました。本当に必要とする利用者の方に、個人情報関係でなかなか情報が届きにくいことが、最大の悩みだと職員の二階堂さんは言われました。

見学時に音訳ボランティアの方にお話を聞くことができました。録音したテープを3回校正し正確を期すそうです。3回校正するところは全国でも少ないとか。質の高い物を利用者に提供しようというボランティアの方の心意気を感じました。短い単行本でも完成するには1ヶ月を要し、何度も話し合いを持って読み方や意味を確認するそうです。



【点字ボランティアの打合せ】

今回見学して強く感じたことは、視覚障害者の方の読書環境が自治体によって非常に格差があるということです。まだ音訳サービス自体取組が進んでいない地域も多く、サピエ自体の認知度も低いです。図書館員は、すべての人が一生読書を楽しむことができるようにすることが責務です。そのためにまず、一步踏み出す何かがあった訪問でした。

(里庄町立図書館 小野礼子)

だれもが使いやすい 図書館をめざして

金光図書館は、戦争中の昭和18年、初代館長が「今こそ文化が大切。生きてお役に立つ図書館を」と願われ、開館した。昭和24年に一人の点訳者から点字図書の受入を、翌25年から貸出を始めた。それから60年以上が経ち、公共図書館業務が主でありながら、点字図書館としても広く認知して頂いている。現在では、書庫におよそ1万5千冊の点字図書を所蔵しており、サピエなどを通して全国に貸出している。また、点字図書ほどの数はないが、相互貸借も利用しながらデイジーなどの録音図書も貸出している。

昨年は、障害者差別解消法施行にあわせ、閲覧室を見直し、耳マークと筆談ボードを設置し、館内読書用に拡大読書器を設置するなど、環境を整えた。さらに、昨年末にはブックターナーを導入し、電子書籍化にも取り組んでいる。また、精神面では県の「あいサポート」研修を全員で受け、館長の「ありません・知りません・できませんは言いません」を合い言葉に、「なければ作る、知らなければ調べる」という姿勢でサービスをしている。

そんな中、一昨年マルチメディアデイジーの絵本を伊藤忠記念財団に寄贈していただいた。多くの方に知って頂きたいと思い、館内に著作権フリーの絵本の視聴体験コーナーを設けたり、ご縁のある支援学校や、館内の催しで紹介して



[マルチメディアデイジー体験コーナー]

今後もだれもが使いやすい図書館をめざして、一人一人に合わせ、多様なサービスができるよう、努めていきたい。(金光図書館 野谷幸子)

県図協セミナー(第2回)に参加して

「公共図書館の役割と学校図書館とのかかわり」

期日：平成28年8月17日(水)

講師：塩見昇氏(大阪教育大学名誉教授)

今回のセミナーでは、図書館の発展に長年尽力され、岡山県立図書館の基本構想にも携わられた塩見昇氏をお迎えし、公共図書館と学校図書館との連携について、最近の動向や課題を交えながらお話いただきました。

岡山の現況を表す新聞記事として、司書の調査で20年以上探していた本と再会できた喜びを綴った県内在住の方の投書と、本だけでなく「作る、見る、聴く」といった県立図書館の活用法の紹介を取り上げ、情報環境の変化を活かした図書館活動の多様化が実際にどう受け止められているか知ることができました。

続いて、学校図書館法改正により「学校司書」が初めて制度化された経緯と課題、佐賀県武雄市をはじめとする「ツタヤ図書館」の登場によって改めて問われる図書館の役割についても解説いただきました。特に、後者は新たに指定管理者制度を導入した地域の図書館との関係を模索している現況が学校司書による質疑応答で明らかになり、協働格差が地域住民に与える影響について考えさせられました。また、公共図書館と学校図書館の関係について実例を挙げ、一方通行の「支援」ととどまらず両者が協働して教育の中身をつくり出していくことが今後の望ましい展開だと述べられました。私自身、高校図書館から公共図書館へ転勤・勤務するようになってから双方の「思い」や内情を改めて実感する機会が度々ありました。講演を聴き、双方



の視点を総括し、より理解を深めることができましたと思います。

(岡山県立図書館

東根さやか)

第91回教養講座報告

「思わず手にとりたくなるチラシづくりのコツ」

期日：平成28年11月16日(水)

講師：吉田 清彦氏

図書館員は、館内掲示や展示イベントなどにチラシを作ることが業務上不可欠です。今回の「思わず手にとりたくなるチラシづくりのコツ」という講座名にまさに惹かれ、受講しました。

人が集まる講座の作り方

まず、「直感 チラシ比べ～企画センス度チェック～」と題されたクイズから講座は始まりました。過去に実施された講座が定員を満たすことができたかをその募集チラシを見て直感で予想します。ターゲットは誰？ターゲットが参加しやすい日時はいつ？どんな内容を求めている？そこからチラシ作りは始まっているのです。 [企画センス度チェック]



思わず手にとるチラシの作り方

続いて、ある講座企画者が作成したチラシ“Before”と吉田氏が手を加えたチラシ“After”の両者を比較しながら、チラシ作りのポイントを教えていただきました。「文章は短く」「文字もデザインの一部」「まずはキャッチコピーを考える」等々…。中でも、「ターゲットにラブレターを書くつもりで」という吉田氏の言葉がとて心に残りました。

今すぐ使えるワードの小技・裏技

最後は、吉田氏による実技でした。「ターゲットが年配者なら明朝体」「チラシの上部3分の1にキャッチコピーを」「暑さは赤、涼しさは青など、色で情報を伝えることも可」など、ワードソフトを操作しながら巧みに技を披露してくださいました。

業務にすぐ活かせる有意義な講座でした。
(就実大学・就実短期大学図書館 岸本京子)

事務局からのお知らせ

■70周年記念事業に向けて

現在、次のような御意見をいただいています。

①記念講演について

- いせひでこ氏・柳田邦男氏（講演と映画の上映）
- 木村泰子氏（講演と映画の上映）

②記念誌について

- 文化・教育・政治・経済など総合的にまとめ、時世を振り返ることのできるもの
- 80周年に向けたビジョン

③協賛関連事業に関して

- 公共図書館と学校図書館の壁を作らず、県図協として何ができるのか検討
- 公民館や文化施設が保有する各種文化情報を相互閲覧できるネットワークの構築
- 図書十進法に則り、各分野の専門

④会計について

- コンパクトで実のある範囲のもの
- 講演入場料、及び記念誌は無料

⑤その他イベント等

- 図書館を使った郷土を調べるコンクール
- 読書スタンプラリー(書店や学校とも連携)
- 岡山県下のお宝展示
- 読書通帳を利用した読書推進事業
- NIEに図書館が協賛

来年度からは実行員を立ち上げ、70周年記念事業に向けて、具体的に計画を立てていきます。まだまだ御意見、実行委員を募集しています。

平成29年3月1日発行

〒700-0823 岡山市北区丸の内2-6-30

岡山県立図書館 図書館振興課内

岡山県図書館協会 会長 村木 生久

TEL：086-224-1286